

新課程に望まれる教科書のあり方 地理A編

駒澤大学教授 中村和郎

日常の中の地理

外国旅行の経験がある人なら、初めて国際線の飛行機に乗ったときのことを思い出してみよう。これからという人はその場面を想像してみよう。

飛行機が離陸すると、家々も樹木も手にとるように見える。低地に水田が、台地の上には畑が広がり、その境界に森林の帯が連なっていたりする。それも見る見るうちに小さくなって、やがて田畑と森林の区別もつかなくなり、地図帳で見慣れた海岸線などが見えたりする。…まるで新しいことを発見したかのような感動がある。

機内のスクリーンに航空ルートが映し出され、今どのあたりを高度何mで飛んでいるのかを示してくれる。なぜこの高さなのだろう。なぜこのルートなのだろう。

何気ない日常の行動の中には、地理的に見ていたり考えていたりする場面が意外に多い。

一新する教科書

指導要領が変わり、地理Aの新しい教科書は、体裁も内容もすっかり変わるようだ。

どのページも写真や図が大きな部分を占め、本文にあたる文章は極端に少なくなりそうだ。

内容的にも、今まで見慣れてきた地理の教科書は知識注入型の記述が多かったのに対して、新しい教科書は、自分の体験や作業を通して地理的な「学び方、考え方を学ぶ」学習を一層充実させる型へと一変するはずだ。冒頭のように、たいていの人が体験することを通して、地球のことや地図のことなどを学ばせようとするものとなるだろう。

このような大変化が起こる背景を私なりに振り返ってみておきたい。

1999年に「国際化、情報化や、科学技術の発展、環境問題への関心の高まり、少子高齢社会の到来など、社会の状況が大きく変化する中で、21世紀を生きる人材を育てるため、豊かな人間性をはぐくむとともに、一人ひとりの個性を活かしてその能力を十分に伸ばす新しい時代の教育の在り方」をめざす学習指導要領の改訂が行われて、この新しい考え方に沿って編まれた新しい教科書がいよいよ2003年度から使われるようになるのである。

仄聞するところによると、「ゆとり」のある教育を求めて教育内容を厳選する方針を押し進める中で、「網羅的で、知識の記憶に偏った学習」になりがちだった地理は、教科の存続さえ危ぶまれる状況があったらしい。地理教育の危機感を抱いた地理学関連諸学会の方々と一緒に国会議員などに地理の存続と充実を陳情に行ったときの感触では、地理教育の重要性に対する認識は残念ながら決して高いものとは感じられなかった。

アメリカ合衆国では「合衆国および世界についての国民の無知は、わが国の福祉、国力、国際的な相互依存に、さらには、外国の人々への影響にも大きな結果をもたらすだろう。地理教育は、この無知を正すのに必要なものであり、加えて地球上の資源を効果的に管理するのに必要な知識と理解を未来の世代に与えるものである。」(中山修一 『地理にめざめたアメリカ』1991 古今書院)と力強く宣言し、連邦議会がそれを認める形で、地理教育復興の全国的な運動が展開されたということを知ると、国の認識という点でも地理学者の

努力という点でも、彼我の違いを感じないわけにはいかない。

それはさておき、新学習指導要領で地理が歴史とともに基本的な科目として維持されたのは、きっと関係者の努力があったからであろうと、地理教育の一端を担う者としては素直に喜びたい。

知識か学び方か

このような問いが出るたびに私は、信州の諏訪が生んだ非凡な地理教育者であると同時に優れた地理学研究者でもあった三澤勝衛のことを思い出して、読み直してみる。私の知識が乏しいせいもあるが、この人ほど徹底的に学び方を教えた地理の先生はいなかったのではあるまいかと思う。

「由来教育というものは教えるのではなく学ばせるものである。学び方を指導するのである。…既成のものを注ぎ込むのではない。構成させるのである。否創造させるのである。」(三澤勝衛 新地理教育論)という強い信念を持っていたから、教科書に書いてある知識だけを覚えて、眼前の事実を見ようとも考えようともしない生徒には「他人の考えたことを覚えて何になる。自分で考えろ。」と言ってきびしく叱ったという。

このような教育は、大正から昭和初期にかけての自由な教育が可能で、深刻な入試もない時代だからこそできたということが出来るが、やはり希有な教育者であった。

三澤は身近にある柿の木の梢の曲がり方も、蛇行する河川の滑走斜面の土地利用も、注意深く観察して、なぜここにそれがあるのか、なぜあそことは違うのかと常に問い続けたのであった。その疑問を解いてゆくためには、教科書は役に立たなかった。だから現象そのものをよく観察して、自分で考える以外にない。長い人生の中では自分で考える力こそが「生きる力」となり得るものだと悟っていたのであろう。研究方法としては、①自

分の眼で観察すること、②観察した事実を地図に示して分布から推論すること、③時間の変化に注目して推論すること、そして④諸現象の相互関連性をとらえて多面的に考えることを重視していた。

顧問をしていた「科学会」の生徒たちには一緒に調べてみようと呼ぶことがあったのであろう。成果の報告書には生徒たちの名前も列挙されている。このような教育だったから、調べる楽しさとそれがわかったときの喜びを、生徒も共有することができた。三澤の教え子から多数の著名な天文学者、火山学者、地理学者、教育学者などが育ったのは自然のことであった。

後に考古学者となった藤森栄一は、何かのことでひどく叱られて三澤との縁が切れてしまったが、それでも若いときに考える力を鍛えられたからこそ、「誰のマネもできない考古学」を創り上げることができたと言って三澤に感謝し、信州の教育が知識偏重に陥ってきたと嘆いた。

生徒に興味・関心を持たせる授業というのは、先生自身が興味・関心を持って進める授業のことだということを痛いほど教えられる。

「多様性を増す人間行動と現代世界」

新しい教科書に話を戻そう。地理で「人間行動」がキーワードとして使われるのはこれが初めてではないだろうか。

地形、気候、人口、都市、産業などから構成されていた古い地理教育を受けた人や、世界各国地誌が地理だと考えている人にとっては、「人間行動」ということがなぜ地理なのかという素朴な疑問がありそうに思われる。

「人間行動」という言葉から連想するのは何だろうか。勤務先や学校へ行くのは行動である。自分の住む場所を求めて家を建てるのも行動である。畑に小麦やじゃがいもを栽培するのも、工場でコンピュータを組み立てるのもまた行動である。

しかし、「多様性を増す…」でいう人間行動は、「世界各地の消費や余暇に関する行動、観光、ボランティア活動など」のことである。教科書を見ているだけでは、なぜそうなのかがわかりにくいかもしれない。学習指導要領によるとこうである。

地理Aでは、まず「現代世界の特色と地理的技能」の学習から始まる。現代世界を学ぶもっとも基本的なこととして、地球のことや日本の位置に関する基本知識を学ぶとともに、世界の略地図を描けるように指導することが加わった。続いて、「現代世界の特色」として「結び付く現代世界」と、「多様性を増す人間行動」か、もしくは「身近な地域の国際化の進展」のどちらかを学ぶようになっているのである。

このような「項目間選択」ということも、今度の学習指導要領で初めて取り入れられた。取り上げた項目については十分な授業時数を配当できるようにしなければならないので、身近な地域の野外調査の方法が身につくことを目標とする「国際化の進展」は、生徒の特性や学校所在地の事情等を考慮して選択するようになったのである。

「結び付く…」で学習対象とするのは、国際貿易や人の国際間移動などである。これらの学習で身につけることが期待されている地理的技能は、農業統計や貿易統計や出入国管理統計などを利用して、その中から必要な情報を選択し、グラフや地図にするなどの処理をしたり、とくに年次の異なる統計や主題図を比較し関連づけて地域性を読み取らせたりすることなどである。

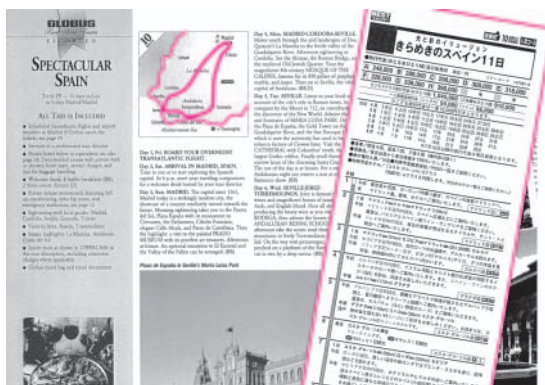
生産と消費とは対になるものであるが、そのうちの生産に関することは「結び付く…」の章で扱われることになる。そこで「多様性を増す…」の章では消費に関することを扱うことになったというわけである。そしてこの章で学習させる地理的技能は、「身近な情報を地理情報として活用する技能」である。

余暇ということを考えてみよう。1日の中では普通は会社が終わった後の時間であり、1週間では日曜日、1年では祝祭日のような日のことを連想する。学校についていえば、夏休みや冬休みがある。しかし、これらは国によって、地方によって違っている。祝祭日が多い国もあれば、少ない国もある。日本はどちらかといえば多い国らしい。なぜだろう。

余暇の過ごし方にも、国によって差がある。ヨーロッパなどの人たちは、学校の夏休みも長いので、家族で外国のリゾート地などへ出かけて長いバカンスを楽しむ。どこへ行くことが多いのだろうか。日本人が行くところと違うのだろうか。

カナダの観光コンサルタントが書いた論文を読んでいたら、外国旅行に関して3つのタイプがあると書いてあった。もっぱら旅行会社が計画したパッケージに参加するタイプ、自分で計画して旅行するタイプと、旅行をしたがらないタイプだそうである。日本人は旅行をしたがらないタイプが多いと書いてあったが、そうだろうか。

余暇とその過ごし方について、地域性があるらしいことがわかるし、いろいろな疑問も浮かんでくる。しかし、それを調べようとすると、生産や



外国と日本の旅行パンフレット

国際貿易などと違って統計も整っていないし、まとまった研究成果が出ているとも限らない。自分でどんな資料を使えるのか、どのようにそれを処理すればよいのかを考え出さなければならない。

「多様性を増す…」の項目で身につけさせるべき技能について、学習指導要領には「身近な情報を地理情報として活用する技能」とある。

たとえば、旅行会社に行けば容易に手に入れることができる観光パンフレットは「身近な情報」である。もちろん観光パンフレットは、地理教育のために作られたものではない。しかし、使い方によってはやっぱりな地理教材になる。

外国の旅行パンフレットを手に入れられれば、余暇の地域性について、さまざまな比較ができそうである。かりに、日本とカナダのスペイン旅行案内を比較してみよう。両国の観光パンフレットの日程表はどう違うのだろうか。

1) どこを観光するのか、どのような観光をしているのか。2) それぞれの観光地での時間の使い方はどうなっているか。3) 日本の場合食事が多いが、外国の場合はどうか。4) 以上のことから、二つの旅行における行動の違いを考えてみよう、という具合だ。生徒たちはなぜ行動の違いがあるのか、という興味を持ち、余暇の地域性についても考え始めるだろう。

「生活・文化の地理的考察」

「生活・文化」は現行の教科書でも扱われているので、しだいに定着してきていると思われる。世界の生活・文化を地理的に考察するには、どんな方法があるのだろうか。作業的・体験的学習を重んじる新しい教科書では、どんな作業が用意されているのだろうか。

直接体験するのがいちばんよいとはわかっている、それはなかなか困難であるから、学習指導要領では「この項目の学習では、画像や文書…を

収集、処理してとらえる活動が中心になると考えられる。その際、インターネットなどを活用することも考えられる」と書かれている。

「生活・文化」の写真素材として、地理的に考察させる方法がありそうだ。

たとえば、マレーシアのクアラルンプールの街角の写真を用意してみよう。おそらくさまざまな人が写っている。その人々の差異はなんだろう。なぜ服装だけでなく、顔つきや体格も、宗教も食べ物も生活習慣も違う多様な人々がマレーシアには住んでいるのか。写真を見て感じる疑問を追及し、調べていけば、多民族国家マレーシアの「生活と文化」がしだいにわかってくる。

もし、マレーシア滞在記（たとえば、谷口雄一『ラサ・サヤン日誌』1999 文芸社）などを読んで紹介したり、先生か生徒がマレーシアに行った時の体験を語ったりすることができれば、なおさら興味を倍増させることができるだろう。

新しい学習指導要領を具現化する新しい教科書、日常の中の地理から出発して、地理的見方・考え方を身につけるための素材が提供されている、そのような教科書で、生徒一人ひとりが地理的に考える力を養っていけるよう、教師の側も既成概念にとらわれない指導法を創造しなければならない。